

芥川龍之介

漱石先生の話





# 漱石先生の話



## 木曜会

大正四五年の頃私達、私や久米君、松岡君、今東北帝大の先生をしている小宮豊隆先生、野上白川先生きゆうせんなどよく夏目先生の宅たくに出入りしました。と言っても一週一回、木曜日の夜に寄ることにしていました。が、木曜会とは誰たれが名づけたものかはつきりしません。先生のお宅は玄関の次ぎが居間で、その次ぎが客間で、その奥に先生の書齋があるので、書齋は畳なしで、板の上に絨氈じゆうたんを敷いた十畳位の室しつで、先生はその絨氈の上に座布団を

敷き机に向つて原稿を書いて居いられた。其書齋は先生の自慢の一つであつて、ある時こう言われたことがある。

『先達せんだつて、京都の茶室をたくさん見て来たが、あんな茶室より、俺の書齋の方がずっと雄大で立派だ……』

私達の木曜会はいつもその書齋で開かれました、先生の書齋の雄大さなど私にはよくわからなかつたが、天井板に鼠の穴が見え、処々に鼠の小便の跡も見ることが出来ました、書齋に一つの高窓があるのですが、その高窓に監獄か、気狂い病院の窓にでもあるような頑丈な鉄格子がしてありました、どんな了簡で先生があんな頑丈な

鉄格子を用いたものか私にはまだ疑問の一つになって居ます——その書齋で私達は先生を中心に夜よを更かしたものです。『もう遅いから歸りたまえ』と先生に注意されてはじめて座をたつという有様でした——先生のお宅は早稲田南町で、今では先生の宅の跡も大廈たいか高樓こうろうが並んで居りますがその頃、先生の宅を出ると道路の向う側がお医者さんの宅で、その側そばに小さい一尺ばかりのどぶがあった、夜更けて先生の宅を出た私達はきまつてそのどぶに立小便をやりました。不思議なもので一人がやると、みんなやりました。今は大学教授の小宮先生や野上白川

先生も立小便の組でした。ある晩、僕と久米君とが両先生に一足おくれて外へ出てどぶへ立小便に行くと、小宮、野上両先生に並んで……やりながら、小宮先生が『僕は近頃、後頭部に白い髪がぼつぼつ出て来ましたよ。』というと野上先生も『僕も発見しました』と語り合っていたことをきいたことなどあります。——木曜会では色々な議論が出ました。小宮先生などは、先生に喰ってかかることが多く、私達若いものは、はらはらしたものです。ある時、例の通り夜更けに宅を出た、立小便のところ以小宮先生に『あんなに先生に議論を吹っかけて良いもの



でしよるか』ときくと、小宮さんが言うには『先生は僕達の喰ってかかるのを一手に引受け、はじめは軽くあしらっておき、最後に猪が兎を蹴散らすように、僕達をやつつけるのが得意なんだよ、あれは享樂しているんだから、君達もどんどんやり給え』……というので、それから私達もちよいちよい先生に喰ってかかるようになりました。

## 国辱

先生の書齋は先生自慢の一つだったに拘らず、こんな

ことがあった。——ある時、アメリカの女（もう少し尊敬して言えば、御婦人）が二人連名で、先生へ訪問を申し込んだことがある。その女と言うのは観光団か何かで日本に来たアメリカの文学——文学者とまで行かなくとも詩など好んで読んでいる女らしく、勿論英語で申込の手紙を先生に寄せたのです。それに対し先生は訪問を断られた。断りの手紙は矢張り英文で認めたのですが小説を一篇書くよりもその方が骨が折れたと申されました。……アメリカの女の訪問を断られたことは如何にも不審に思われたので、おそるおそる先生に『どうしてまた、

アメリカの女が折角会いたいというのを、断られたんです』ときくと、『夏目漱石ともあろうものが、こんなうすきたない書齋で鼠の小便の下に住んでしたいる所を、あいつ等に見せられるか、アメリカに帰って日本の文学者なんて実に悲惨なものだなんと吹聴されて見ろ、日本の国辱だ』といかつい顔をしました。先生は実にこうした一面が多かった人であります。

## 銭湯

先生はよく銭湯に出かけられた。ある日先生は流し場

場で石齧をつかっていると、傍そばの上り湯のところに一人の頑丈な男がどんだん湯を浴びながら、後うしろに跼かがんでいる先生の頭の上にその飛沫を遠慮会釈もなく浴びせかけた。——根がかんしやく持の先生は一途にむっと腹が立ったのででかい声を張り上げて『馬鹿野郎』とどなりつけた。——どなりつけたまではよかったが、それと同時にこの男が自分に手向って来たらどうしようと思つと、急に怖ろしくなつて少しうろたえたそうですが、先生のえらい権幕におそれたものかその男が、素直な声で『すみません』と謝つた……『おかげでやつと助かつたよ』

と先生はほんとうに助かったように述懐されました。

## 詩作

先生の肝癩は実に有名なもので殊に胃腸の悪い日にはそれがひどかった。平素でも仕事をしている時はきちんと机に向って、気むずかしい顔をしていましたが大抵朝の九時頃から午前中原稿を書かれた。最も仕事に熱中されたのは『行人』の時と『明暗』の時、朝の九時頃から午後の六時頃までぶっ通し書かれたことも珍らしくなかった。しかしそれは例外で、午後は仕事をきり上げて

詩作に耽けられた。詩と言っても新体詩ではなく漢詩です。漢詩という奴は（——私などさっぱりわかりませんが）韻などという六ヶ敷い約束事があつて仲々面倒臭く、漱石先生もよ程その詩作が苦しかったと見え、うんうん唸<sup>うな</sup>って、七言絶句や五絶を一つか二つものしたものです。がその詩作最中の先生と来たら迎もよりつき難いむずかしい顔をしていたものです。

## 志賀君と先生

私などはじめて先生とこへ上つてお目通りした時はど

うも胸に動悸がして膝頭がブルブルふるえたものでしたが——先輩の志賀直哉君がある日先生をはじめて訪ねまして、例の書齋に通された。先生は机の側そばの座布団に厳然と座り、さあ何処からでもやって来いと言わぬ許りに構え、禅坊主が座禅の時のように落着いているので志賀君どこへもとりつく島がなく默然もくぜんと先生の前に控えたが、膝頭がガタガタとふるえ出して益々心細くなつて来た頃一匹の蠅が飛んで来て先生の鼻の横うちよに留とまつた。先生はその蠅を追うために手をあげたら、志賀君も救われたのですが、先生は厳然としたまま頭を横に一つ

強くふってその蠅を追った……ので志賀君はいよいよ困ってしまったという話がありますが其時の志賀君の震い方がよ程強かったものと見え、志賀君が帰った後で先生の奥さんが先生に『あの方は心臓病か何かでしょう』と言ったということですよ。

## 検 束

先生のお宅は早稲田南町でしたがある晩界限で火事があつた。恰度先生がその火事の町を通つてこれから宅たくの方へ帰りかけていた処へジャンと来たのですから、先生



は非常線に囲まれてしまったのです。そんなことには頓とん着じやくのない先生がぼつぼつ歩いて来るといよいよ非常線に差しかかった。巡査が威丈高な声で『何どっちから来た』ときいた。そこで先生は『はじめはこっちから（宅の方）来たが今はあっちの方（火事場の方）から来た』と頗るロジカルな先生らしい答えをした。元よりそんなロジックなどわかってる筈もない巡査は、うるん臭い奴とにらんで早速先生を検束し、道側みちがわの材木を指して『かけろ』と言ったまま、又あたふたと出て行ったが間もなくもう一人の検束された者を引っぱって来た。巡査はいきなり『貴

様は帰っても良い』と先生をにらみつけた。その時先生はこの儘其処を去るのが惜しく、なんとか一晩位警察の監房で送って見たい気になって『代りが来たから追立てるんですか、もう少し此処へおかして下さい』と言った。処巡查は大へん怒った顔をして『ぐずぐず言わんで行け』と叫んだので仕方なく宅へ帰ったという話もあります。

## 禅坊主

ある禅寺に古画や器物の国宝があることを知った先生はある日俵でわざわざ此寺へ出かけ、一刻も早く国宝を

見たさに靴の紐を解きかけた処、取次僧が跼かがんでいる先生の頭の上から大音声で『お前はなんで靴の紐をとくのだ、誰たれがお前に上がれというた』と叱りつけた。先生もいかにもと思つて一寸たじたじの形で顔を上げると、その瞬間取次僧は衝立の蔭にひらりと隠れた。叱られて何か言おうとした先生の形を見てとり衝立の物蔭に姿をかくしたところ流石禅坊主だと内心打たれる所があり、そのまま靴の紐を結び直して引返そうとすると急に衝立の蔭からその坊主が表れて『怒らずに帰るのは感心、感心』とほめ立てたそうですが先生は『衝立の蔭にかくれたま

ではよかったが、後うしろから感心々々と声をかけるなぞまだまだ臭い、あれだからまだ玄関番などしてると思ったそうです。

## 女

ある人が先生に、『先生のような方でも女に惚れるよ  
うなことがありますか』ときくと、先生はしばらく無言  
でその人をにらみつけていたが『あばただと思つて馬鹿  
にするな』と言つたということ<sub>を</sub>極く最近ある友達から  
ききました。





日本文学電子図書館

---

漱石先生の話

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

底 本：『芥川龍之介全集』第8巻  
岩波書店

1982年12月20日 第2刷発行



日本文学電子図書館